

蔵王山安善寺

◆編集・発行人◆
近藤真弘

〒940-0052
長岡市神田町1丁目4番10
TEL.0258-32-2811

◆スタッフ◆
小林国二・高橋 潔・高橋利春
屋代 健・飯泉隆史・山内芳次
近藤龍弘・近藤マリ子・近藤久美子
印刷・株式会社印刷

『お釈迦様の息吹を感じて〜中道の教え〜』

泰忍 弘

経験したことのない小雪の冬も間もなく終わり、お彼岸の明けと共に春がやってまいります。先日テレビで長岡駅

前の様子が映っており、雪の無いことがニュースになっておりました。その際にコメントを求められた方が、「雪国

では雪が降りすぎても災害であるが、逆に雪が全く無くても災害だ」と言っていました。確かに雪と共存する雪国ではある程度の雪は必要なんだと、今年



ブダガヤの大菩提寺

の一月下旬から人生二度目となるインドに行つて参りました。五年前に初めてインドに行つた際はその報告を季刊誌にも書かせていただきましたが、今回も前回同様、お釈迦様の仏跡を巡ることが旅の目的でした。四大聖地(生

まれた地ルンビニー・悟りを得た地ブダガヤ・最初に法を説いた地サルナート・涅槃に入った地クシナガラ)や祇園精舎、靈鷲山、ナーランダ大学跡など様々な聖地で法要も勤め、充実した旅でありました。中でもお悟りを開いた地であるブダガヤにある大菩提寺は圧巻でありました。二〇〇二年に世界遺産にも登録された大菩提寺は五十二メートルの高さを誇り、何よりも驚いたのは紀元前の建物が当時の形をほぼ残したまま発見されたということです。インドで仏教が衰退した十三世紀、イスラム軍団が北インドに攻め入りました。そして仏教・ヒンドゥー教・ジャイナ教の寺院、仏像、神像の破壊が行われました。そこでブダガヤに僅かに残った仏教徒は、大菩提寺を破壊から守るため、土で覆って小高い丘に偽装したそうです。その後約六百年間、埋もれたままとなっていました。十九世紀、イギリス人考古学者カニンガムの調査により埋められていた寺院が発掘され、今日の姿

を取り戻したそうです。大菩提寺の本堂裏には正にこの場所でお釈迦様が悟りを得たことを示す金剛法座と菩提樹の聖木があり、世界中から僧侶や仏教徒が集まつてお祈りを捧げたり、坐禅をしたりしておりました。この地でお悟りを開かれたお釈迦様は最初の説法の地サルナートにおいて「中道」の教えを説かれました。

快樂の生活や苦行主義の両極端に身を置くのではなく、調度の良いところに身を置くことが大切だという教えです。お釈迦様は悟りを得られず悩む琴の名手である比丘に言いました、「琴の弦は、締め過ぎても、緩め過ぎても、いい音は出ない、程よく締められてこそいい音が出る、比丘の精進もそうあるべきだ」と。

改めてお釈迦様の息吹を感じるインドの地で有難い経験をさせていただきました。願わくは来年の長岡の雪も両極端ではなく、丁度よく降ってくれたらなと思います。

新・檀信徒総代からのご挨拶

高橋利春



ち等、調査計画の業務を行っていました。

1月の役員会で安善寺の檀信徒総代3名のうち1名が高齢で交代員として新たに就任させていただきました高橋調査設計(株)の高橋利春でございます。一言自己紹介とご挨拶をさせていただきますのでよろしく願います。

私は新発田市の清水園(新緑と紅葉の庭園が素晴らしい新発田藩溝口公茶室庭園)の近くに生まれ、そこを遊び場として育ちました。

昭和40年新潟県立新発田商

工高等学校土木科(当時)を卒業して建設省に入省し、またま土地家屋調査士事務所で図面を書いたところ、「こんなにもやれるのだったら自分でやったらどうだ?」と言われて翌年勉強して土地家屋調査士試験に合格しました。

勤務先は北陸地方整備局長岡工事事務所、洪水予報係(当時)に勤務し、天気予報で大雨となると大忙しでした。通常は信濃川の量水標の付替や魚野川の堤防の法線打

花火の時等は信濃川にモーターボートを出して安全の見守り等をやったりして楽しい職場でしたが、将来独立したいという夢が消えず、測量士もあるし将来は土地家屋調査士事務所か測量会社で食べていける、30歳になったら自分でやろうと決意し、N測量会社に勤務し、30歳で独立したものの最初は仕事がもらえず、それでも不動産会社に根

気よくお願いし、T不動産の初代社長から自宅の測量を任せられました。その仕事を認められ、土地の開発・測量などを一手に任せてもらえるようになりしました。現在は事業も安定し41年が経ち、民間だけでなく官公庁の仕事と半々くらいの事業量となつています。

おかげさまで長岡に住み着いて55年、安善寺様とお付き合いをさせていただくことに

なり30年、義母の墓を建立して14年とお付き合いの浅い私が檀信徒総代の一員とは甚だ僭越と思いますが、皆様の御指導をいただきながら精一杯務めさせていただきたいと思っています。

常に公正な仕事を“と心がけ、「誰かが得をすれば必ず誰かが損をする。片方に得をさせようという考えはダメ」お互い気持ちのいい仕事をするには常に相手の気持ちになつて考えること。相手と自分を置き換えて考えること。と自分と社員に言い聞かせております。

その私も3月2日に73歳になりました。社長を引退し会長職になって2年。社是の「誠実・努力」をモットーとし、会社も順調に推移してきておりますので弊社の仕事、土地の測量や建物の登記等わからないこと、少し聞きたいことがあったらお気軽にお声がけください。お寺の事と合わせて一層精進いたす所存でございますので、なにとぞ変わらぬご厚誼ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

檀信徒総代

交代にあたり

此の度、安善寺檀信徒総交代にあたりまして、まずもつて平成二十一年から約十一年間の長きにわたり総代のお役をお勤めいただきました鈴木昭次郎様に心から感謝申し上げます。鈴木様が総代をお勤めの間、開山四百五十回忌や、昨年の晋山結制などの大行事では多大なるご尽力を賜り、また、お彼岸や、大般若法要など安善寺の行持には欠かすことなく参列され檀信徒に儀範を示していただきました。鈴木様におかれましては、今後とも引き続きのご教授並びに安善寺護持にご尽力賜りたくお願い申し上げます。歴史ある安善寺は現在まで素晴らしい檀信徒総代、世話人、檀信徒によりその歴史を紡いでまいりました。今後も高橋新総代、小林総代、太刀川総代を筆頭に変わりゆく社会に順応しながら益々の安善寺護持に努めてまいります。

泰忍 真弘合掌

【越後曹洞宗名刹巡り】

栃尾城主三代菩提所としての大禅刹。 五九四年の往時を見守って――。

長岡市北荷頃 曹源寺

千九四〇―〇二四一 新潟県長岡市北荷頃七六九甲

慈光寺を含む七ヶ道場の一つに数えられていた古刹であります。



<http://www.so-genji.jp/>

このお寺の創建は、寺伝によると森上に草庵を結んで修行に励んでいた大龍音吉禅師が、ある夜「庭の藤づるを伝って行きその根元に至ったならばそこに一字を建立するがよい。必ず栄えるであろう」と夢枕に立った御仏の声に導かれて、北荷頃の地に草庵を結び草源寺と称し（一四三―前）、これが曹源寺の前身であると伝えられています。そして大龍音吉禅師は、長岡市乙吉の龍穩院を開いた公器賢章禅師を招き、当寺を整備して曹源寺と改め、公器禅師がその初代開山となりました。文明年間（室町中期）に至って栃尾城主の北畠山城守の帰依するところとなり、当寺の開基となりました（二四九）。その後、天正年間（安土桃山時代）には栃尾城主神子田

長門守、慶長年間（同）に松平筑後守の菩提所となり、寺の門前には制札、下馬札、掟札などが整備され、栃尾城主三代の菩提所としてその偉容を誇ってきました。

江戸末期・天保十一年（一八四〇）に祝融の災いに遭い、一堂伽藍ごとごとく焼失しましたが、天保十四年に再建され現在に至っています。

代々住職の活躍は多大で、近郷の八カ寺を開創しています。

また当寺は、曹洞宗越後寺院の最高位に位置する四ヶ道場（雲洞庵・耕雲寺・種月寺・



延命地藏菩薩 1855年 京都の大仏師 七条左京作長岡市指定文化財



欄間彫刻「三国志、唐人馬上の図」江戸末期 石川雲蝶作

台湾・芝山巖と日本人①

台湾における日本人の姿を追って

ながおか史遊会 湯本 泰隆

長い間日本の歴史や文化を勉強し、「日本人とは何か」ということを考えておりましたので、暇を見つけては当地における日本人の痕跡を踏査したり史料を漁ったりしておりました。日本人や日本文化について深く理解したいとき、情報量が豊富な日本国内で調べごとをしたりまとめたりすることも大切なことかと思いますが、同じように海外における日本人や日本が当地で行ってきた軌跡を辿ることも大切かと思われま

す。20代の後半、たまたまご縁があり、二〇一一年から二〇一三年、台湾の台北、台中、高雄に滞在する機会を設けました。

ご存じのように、台湾は戦前、日本の領土の一部として存在しておりました。私の収集している教育系コレクションの中には、戦前に使用されていた日本地理の教科書があ

りますが、そこには朝鮮半島も台湾も日本国領土として扱われており、80年代に生まれたものにとつては新鮮に感じます。台湾のほぼ中央部には、「玉山」という名前の山があり、標高は3,952mで台湾最高峰の山となっております。日本統治時代は、「新高山（にいたかやま）」と呼ばれていました。「新高山」といえば、真珠湾の攻撃を指示する暗号となった「新高山登レ1208（ニイタカヤマノ



新高山（玉山）『台湾案内』より

ボレヒトフタマルハチ」）。その「ニイタカヤマ」です。富士山は標高3,776mなので、富士山より高い山ということになり、従って日本の近代史においては一時期日本一高い山は富士山ではなくて、新高山という時期があったということになります。日本における台湾の植民地政策は、日清戦争の結果下関条約によつて台湾が清朝（当時の中国）から日本に割譲された一八九五年四月十七日から、第二次世界大戦の結果ポツダム宣言によつて台湾が日本から中華民国に返還された一九四五年十月二十五日までの時代で50年間も続いていたことになります。その間、多くの日本人が同地に渡り、現地の人たちと共にインフラを整備してきました。教育制度、地下鉄、下水道、今思い当たるものを並べただけでもかなりの事業に日本人が関わって

います。私は教育畑の人間でもありますので、今回は台湾の教育に影響を与えた日本人教師たちのお話をさせていただきます。台北郊外のMRT「芝山駅」を下車して少し北東に向かつて歩くと、こんもりとした樹木に覆われた岡のような地形の場所にたどり着きます。日本人向けのガイドブックなどで紹介されることはほとんどありませんが、現地で知名度はそれなりに高く、「芝山公園」と呼ばれ、散策地とされて整備されています。この地はかつて、終戦まで「芝山巖（しざんがん）」と呼ばれ、「台湾における教育の聖地」とされてきました。日本人による台湾統治が始まったばかりの頃、当時文部省の学務部長心得だった伊沢修二はという人物は、「教育こそ最優先すべきである」と植民地における教育の必要性

台湾の近代教育の礎を築いた伊沢修二
（『楽石自伝教界周遊前記』より）

を訴え、自身が集めた優秀な人材7名とともに台湾の地へと向かいました。当時、芝山巖にあった「恵済宮」という道教の寺院の一室を借りて「芝山巖学堂」という日本語学校を設立しました。最初は生徒6人の生徒が入学し、台湾総督府学務部長となった伊沢と教師7人の計8人で日本語を教えていました。伊沢は当時、「台湾においては、フランスのように宗主国の言語・文化を押しつけるのではなく、またイギリスのような愚民政策でもなく、第三の『混和主義』を採るべきである」と主張。伊沢には、台湾は日本が経済的な収奪を行う植民地ではなく、北海道や沖縄、樺太と同じ「新附の領土」であり、その人民は、日本国民同胞として扱うべきだという強い信条があつたのです。

(次回へ続く)

【筆者プロフィール】

1984年12月21日生まれ。ながおか史遊会を主宰。にいがた史遊会やゆきぐに史遊会の設立に関与するなど、地域に眠る文化財を探索しながら、研究者と市民をつなげる活動や講演、執筆なども行っている。長岡市在住。

またまた
ボブの独り言

悪者にしないでね

今年は肉球にひんやりと雪を感じることもなく春を迎えそうです。窓から差し込む暖かな日差しのおかげで、いつもならどっこいしよと動かす重い体も軽やかに動く。こんな日は外へ散歩でも…と言いたいところだが階下で私を待ち構えている宿敵モモのせいで下りるに下りられない。外は諦め仕方なく久美さんをお願いをして窓を開けてもらいベランダでまったり。すると聞きなれた元気な声とピシッ、ピシッとリズムミカルな音がする。ベランダから下をのぞく



と真人君と悠真君が元気に縄跳びをしている。交差とび、二重とび、そして高難度のやぶさ！二人とも軽々と飛んでいる。そんな軽やかな二人がうらやましいが私も若いころはすごかった。ある日は鳩を、ある日はネズミをつかまえ、久美さんの前へ献上したものだ。毎度久美さんの叫び声つきだったのがきつと歓喜の叫びだったに違いない。

そうそうネズミと言えば今年の干支。干支といえばネズミに嘘を教えられたせいで到着が遅れてしまい十二支の中に入れなかったという猫の私にとっては面白くない話である。もう一つ、2月15日、お釈迦様の入滅の時のお話。お釈迦様がお亡くなりになりそうだと知ったお釈迦様の産みの親

ボブの独り言

である麻耶夫人は天から降りてきてお釈迦様に起死回生の薬を投げ入れます。しかし薬は沙羅双樹の木に引っ掛かりお釈迦様のところまで届きません。そこでネズミがその薬を取りに行くのですがそのネズミを猫が襲ってしまい結局薬はお釈迦様のところへ届かず、お亡くなりになってしまふのです。悲しみに暮れるさまざまな人々や動物が描かれているのが涅槃図なのですがネズミを襲ってしまった猫は描かれていません。この時期、安善寺の涅槃図を見るたびに何だか悪者になった気がする私なのです。そんな元気のないうちに久美さんはまたたびという魔法の粉をばらばらっと投薬。階下のモモとも戦えそうなくらい元気になります。モモに挑むのはひとまずベランダで一眠りしてから。

にゃん。

お便り原稿用紙

季刊誌では、檀信徒・読者の皆さまと、ごいっしょに誌面をつくりながら、コミュニケーションを深めたいと思います。
ハガキまたはお手紙、ファックスなどで、お気軽にお便りをお寄せください。お待ちしております。

原稿の例

- 思い出話／ご家族、ご先祖、お寺の思い出話など。
- 私に言わせて／家事や子育てのお話、身近な出来事など。
- 教えてください／仏事のしきたりや疑問（編集部や住職がお答えします）など。
- 嬉しい・楽しい／嬉しかったこと、楽しかったこと、悲しかったこと、怒ったこと。

編集 雑感

この度、新たに編集委員会に入りました、山内芳次と申します。何卒よろしくお願い申し上げます。

当季刊誌の発行は、前号東堂様のお話で、故安藤一夫様が「安善寺が檀信徒の皆様方から身近な存在になっていただける手助けになるように、また仏教が大勢の人たちに親しんでいただき、生活に活かしてもらいたい」との願いから平成十年に創刊されたことを知りました。人から

人へと願いを伝える媒体としての紙の印刷物は減ってきましたが、ここで「願い」にまつわる印刷の歴史を紹介させていただきます。

現在、世界に現存する最古の印刷物は、実は日本に存在します。それは「百万塔陀羅尼經」と呼ばれる経文の印刷物で、史実では奈良時代、時の孝謙天皇（後の称徳天皇）が、供養、延命、除災、平和を祈願し、七十六四年（天平宝字八年）から七十七年（宝龜元年）までの六年間の歳月をかけ、一〇〇万枚を印刷させ、木製の三重小塔一〇〇万基の中に納めて法隆寺や東大寺、薬師寺、興福寺などの十大寺に奉納したものです。私も実物を東京の博物館で見たときは感動いたしました。

印刷技術の視点では、当時一〇〇万枚を印刷した技術は未だに謎であり、諸説があります。が、当時、人々が求めたものは、経文を刷った印刷物が欲しかったのではなく、平和、安寧、祈りを求めたのだと思われまふ。一年の始まりには、いつもよき年であるように願いますが、今は新型コロナウイルスの影響で、苦難の状況となっております。改めてよりよい年に転換していくよう願うばかりです。皆さまには今後ともご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

山内芳次